

---

# まあるいきもち

遊佐一二三

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

まあるいきもち

### 【Nコード】

N7799A

### 【作者名】

遊佐一二三

### 【あらすじ】

ぼくは勉強ができない。正確に言うと、テストでいい点を取ることができない。みんなといっしょの「ふつう」になることが、ぼくやママを幸せにするんだろうか？小さな「嬉しいこと」をたくさん知っている、「ふつう」に混じれない「ぼく」の物語。

ぼくは勉強ができない。

正確に言つと、テストでいい点を取ることができない。

たとえば算数の時間に、ゼロのまんまるを書いた時、そのカタチのあまりの

かわいらしさにぼくがうつとりしていると、あつと言つ間にテストの時間が

終わってしまう。

ゼロがかわいいと思うぼくの点数は、いつも限りなくゼロに近い。そうして、みんなが僕を「ばか」と呼ぶ。

いつも思うのだけれど、テストで上手に点を取れば、ぼくは「ばか」とは呼ばれないんだろうか？

ぼくは教室の窓の外で揺れる菜の花が、黄色い海みたいに揺れてるのが、うきうきするくらいきれいなことや、空に浮かぶ雲をじつと見つめていると、地面が動いているように感じて面白いことを知っている。

なのに、みんなはぼくを「ばか」と言つのだ。  
おねえちゃんも。

おねえちゃんみんなと一緒にあって、「あいつはばかだから遊ばないようにしよう。」と言つ。

ぼくはそれは、すごい裏切りだと思う。

ぼくの中には、おねえちゃんとおんなじ、パパとママの血が  
あわさったものが流れているはずなのだから。

おなじものでできているおねえちゃんが、ぼくのことを「ばか」と  
言うのは、

これは裏切りに他ならない。

ぼくはたくさん「きれい」とか「かわいい」とか「おもしろい」  
を知っているし、

本を読むのも好きだし、おしゃべりするのも好きだ。

ぼくができないのは、テストでいい点を取ることだけなのだ。

事件は春の日の、とても天気の良い、気持ちのいい日に起こった。

国語の教科書で「ちょうちょ」というコトバが出てきた時、ぼくの  
アタマの中に、

昨日まで食い入るように見つめていた図鑑のきれいな蝶がひらり、  
ひらりと飛んできた。

ちょうちょ。

こんなかわいいコトバを作ったのは誰なんだろう？

ちょうちょ。

きれいでかわいくて、あったかい春の日にぴったりの、すてきなコ  
トバ。

ぼくは裏庭のお花畑にいるちょうちょにどうしても会いたくなって、  
教室を飛び出した。

「きみたちの名前はなんてかわいいんだろう。」って、  
伝えたくなっただ。

先生は怒って、「またおまえか。」と怒鳴ったし、みんなは「ばかのすることだから。」と

言って笑ったけど、こんな天気の良い日に、薄暗い教室で教科書を読んでるなんて、

そっちの方がぼくにとっては、「ばか」に見える。

温かくて気持ちのいい日には、外で植物の作ったきれいな空気をいっぱいに吸い込んで、この世界は誰が作ったのかを、空を見上げながら

考えるほうがいいに決まっている。

そうして、ぼくにとっての「すてきな一日」を過ごして家に帰ると、ママがどんよりとした顔で、リビングのいすに座っていた。

リビングの棚には、ママが買ってきた「学習ドリル」が、ほとんど手つかずのまま並んでいる。

ママはいっしょうけんめい「勉強しなさい。」と言うのだけれど、ぼくの根気が続かないので、最後には悲しい顔になってしまう。だから僕は、ドリルを全部刻んで捨ててしまいたいものだけれど、せっかくママが僕のために買ってくれたのかと思うと、それでもない。

ママを悲しませるのはイヤなので、ぼくも一生懸命になって鉛筆の先を舐めながらページをめくるのだけれど、いつも心はどこかへ飛んでいってしまう。

ぼくは、なぜぼくのところが勉強を好きになれないのか、どうしてもわからずにいる。

ぼくがみんなみたいに、勉強ができてテストでいい点を取れるなら、ママは悲しい顔をしなくていいのに。

おねえちゃんみたいに、棒の横に目玉の並んだ「ひゃくてん」を得意げに見せびらかして、ママにっこりされたいのに。どんなにがんばろうとしても、ぼくの心は、勉強の方に向かないのだ。

前に、パパとママがぼくのこととでケンカしているのを見た。

パパは、「オレの一族には勉強のできないやつはいない。」と怒鳴っていた。

ママは、ぼくがテストでまんまるの点を取ってきた時と同じように、悲しい顔をしていた。

あとでおねえちゃんが、「あんたがばかだから、おとうさんとおかあさんが

けんかするのよ。」と意地悪を言った。

ぼくも、ママと同じように、悲しい顔になってしまった。

ママが学校に呼び出された。

ぼくもいつしよに、先生のお話を聞いた。

理科の時間に、朝顔の花がだんだんと開いてくるビデオを見たので、朝顔をずっと見張っていたい気持ちでいっぱいだったけれど、ママも先生も真剣だったから、ぼくも一生懸命お話を聞いた。

「専門医を受診したらどうですか？」

先生の言ったコトバの意味が、僕にはよくわからない。

「息子さんは学習障害の疑いがあります。」

やっぱり、わからない。

わかったことは、ぼくが「たのしいこと」を見つかるたびに、先生が困ることと、先生やみんながぼくに、もう学校に来ないで欲しいと

思っている、ということだけだった。

ぼくは「ふつう」じゃないから。

「ふつう」っていうのはなんだろう？

ぼくが「ふつう」だったなら、テストでいい点が取れたんだろうか？  
みんなに仲間はずれにされたり、ママが悲しい顔をするこゝも  
なかったんだろうか？

「ふつう」じゃないのは、ぼくが悪いの？  
どうすれば「ふつう」になれるんだろう？

ぼくは一生懸命考えたけど、どんなに時間をかけてもわからなかった。

ぼくは初めて、じぶんが「ばか」なんじゃないかと悔しくなつた。

空はぼくの大好きな夕焼けだったけど、ちっとも「うれしい」気持ち  
が降りてこなかった。

「うれしい」と「たのしい」を心の中で何度も呼んだけど、喉に小  
石が

詰まったみたいになって、目の前がじわじわと水たまりに沈んだ。

なにもことがでてこなくて、久しぶりに触つたママの手を、  
ぎゅっとつかんだ。

ママは何も言わずに、もっと強い力で、ぎゅーっと握り返してくれ  
た。

僕は「がくしゅうしょうがい」というものらしい。

今までぼくが勉強がでなかつたのは、ぼくのせいではなく、「し

ようがい」と

よばれるもののせいだったのだ。

理由がはっきりしたけれど、ぼくの気持ちはすっきりしなかった。

「勉強ができないのは、しょうがいのせいなんだ。」って言われるのは、

なんだか「仕方ないよね。」って諦められているみたいで、かなしい気持ちをする。

ぼくは「ばか」とは言われなくなった。

かわりに、「かわいそうな子」になった。

ぼくはそっちの方が、ずっといやだった。

ママは、「ばか」な子のママと、「かわいそうな子」のママと、どっちが

いいんだろう？

どっちでも、「ぼく」のママであることに変わりはない。

それは、「ふつう」が欲しかったママには、どっちにしろ不幸なことなのだ。

お父さんのお母さん、ようするにぼくのおばあちゃんが、ママをいじめにきた。

おばあちゃんはいつも何かにつけ、ママに意地悪を言って泣かせようとする。

だからぼくは、おばあちゃんが大きらいだ。

来るたびに、早く帰れ、とありったけの念力を送る。

おばあちゃんもぼくがきらいみたいで、「ひとをきらうときらわれるよ。」と言った

ママのことは本当だったんだ、と感心する。

「じゃ、ママはおばあちゃんが好きなの？」と聞いたら、曖昧に笑っていた。

オトナはコトバをしゃべる時、いろいろ難しいらしい。



この日のおばあちゃんは特に意地悪で、パパと一緒にあって、「おまえのいでんしがわるかった。」という話をしていた。意味はよくわからない。

いでんし、というのは図書室の本でみたことがある。

ぐるぐると規則正しく回っていて、不思議な力タチをしていた。いでんしは好きだけど、それが何をするものかはわからない。

だから、知りたいと思う。

世の中のいろんなことが、不思議でしかたがないから、いっぱい、いっぱい、

知りたいことが溢れている。

ぼくは忙しくて、テストの練習をしている場合ではないのだ。

次の日、ママは「学校に行かなくていいよ。」とぼくに言った。

「かわりに、いつしよについて来てね?」

ママに手をひかれて、区役所の並木通りを歩いた。

近くの木は大きいのに、遠くの木が小さいのはなぜだろう?

遠くのちっちゃかった木も、近くに寄ると大きい。

世の中は魔法みたいな不思議に溢れている。

「青い空は、宇宙の色が透けているの?」と聞いたら、

「そうかな?じゃ、赤いお空はなにが透けてるんだろう?」とママが言った。

たしかにそうだなあと思ったら、不思議で仕方がなくなった。

しばらく黙って考え込んでいると、

「お空は神様の万華鏡だから、神様が振ると、色が変わるんだよ。」と

教えてくれた。

素敵な答えだと思った。

「他の子とおなじようにしなさいって、言ってごめんね。」

「なんで?」

「おまえはおまえなのに、おまえを見ようとしなかったから。」

ママの言っていることが、よくわからない。

「『ふつつ』の子のママになることに必死で、おまえの素敵なところを、

ずっと見逃していたね。」

「ぼくがぼくのまんまで、いいっていうこと?」

「うん。ママだってね、何が『ふつつ』かなんてわかってなかったし、

『ふつつ』が幸せかどうかも、本当はわからなかったんだ。」

ぼくは、ママがぼくのことを好きだと言ってくれているのが

わかったから、菜の花の海を見た時よりもずっと、うれしい気持ちになった。

ママは、区役所でもらった緑色の紙を、パパといっしょに出すことにしたと言った。

そうすると、いろんなことが、今までと違ってしまいうらしい。

「ママと一緒になら、ぼくはいつでもうれしいから、それでいいよ。」

「ゼロがまんまるでかわいいって、ママもそう思うよ。」

まんまるからまた、始めようね。『うれしい』をいっぱい集めたら、ママもおまえも、

幸せに暮らせると思う。」

ぼくは、もうママからたくさん「うれしい」をもらって、

踊りたいくらいだったけど、ママがゼロをかわいいと言ってくれたので、

もっと「しあわせ」な気持ちになった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7799a/>

---

まあるいきもち

2010年10月10日07時09分発行